

インド外交の「ブルーリテラリズム」

溜 和敏

「ブルーリテラリズム (plurilateralism)」、あるいは「ブルーリテラル (plurilateral)」という言葉が現代インド外交をめぐる新たなキーワードとなりつつある。

国際貿易の分野ではしばらく前から用いられているが¹、インド外交の文脈で頻出するようになったのはここ数年のことである。とくに注目を集めるきっかけとなったのは、2020年に刊行されたS・ジャイシャンカル (S. Jaishankar) 現インド外相の著書『インド外交の流儀』(笠井亮平訳、白水社、2022年)において言及されたことであった²。

ジャイシャンカル外相の著書で注目

少し長くなるが、『インド外交の流儀』におけるブルーリテラリズムへの言及部分を見てみよう。

同盟内部での分裂が進展の一つだとすれば、同盟を超えた関係の構築はもう一つの進展だと言える。世界がさらなる^{ブルーリテラリズム}複数国主義の方向に進むなか、成果ベースの協力は魅力を増し始めている。こうした協力関係は目的が明確であり、相容れないコミットメントがある場合でも折り合いをつけることが可能だ。責任の共有に関する必要性の高まりは、フォーマルな組織の範疇にとどまらない影響力に対する理解とセットになっている。アジアは地域機構がきわめて未整備な状態にあるため、こうしたイニシアチヴがとくに注目されてきた。インドは今やそうした複数国主義によるグループのリーダーとして存在感を発揮しているが、それは従来の空間と新たな空間の両方に属していることによる(邦訳 50-51 ページ)

……われわれに想起させるのは、多国間協調主義のクオリティは、結局のところ大間でどこまでコンセンサスを形成できるかにかかっているということだ。そしてすでに知られているように、それこそが現在、欠如している。その結果、組織やアジェンダ時代が共通の着地点というよりは強さが試される場所になっている。関心が制度に対する影響力発揮に向かうなか、国益と国際公共財のバランスをとることは困難さを増している。結果として、その恩恵を被ったのは、^{ブルーリテラリズム}複数国主義だ。なぜなら、多国間協調主義において求められるようになった目的と共通性がそこにはあるからだ。強靱なサプライチェーンの追求はそこでのアジェンダに加わることになるだろうし、とり

わけ保健分野においてはとくにそうだろう（邦訳 238－239 ページ）

このように、フォーマルな同盟との対比で、また従来のマルチラテラリズム（多国間協調主義）との対比で、現在のインド外交がブルーリテラリズムを採用していると論じている。『インド外交の流儀』での言及はこの2箇所（3回）のみであるが、同書が出版されるとこれらの記述からブルーリテラリズムが注目された。たとえばクリストフ・ジャフロワ（Christophe Jaffrelot）は、同書から読み取られるジャイシャンカル外交の3原則の第1として、同盟に代わりブルーリテラリズムを主張している点に着目している³。その後もジャイシャンカル外相がたびたび言及していることもあり（後述）、現代インドの国際関係をめぐるキーワードとして盛んに論じられるようになっている⁴。

ブルーリテラリズムとは

さて、ブルーリテラリズムとは何か。基本的にはミニラテラリズムの意味に近い。ミニラテラリズムとは、少数国による枠組みを重視するアプローチであるが、二国間のバイラテラリズムとは区別されるため、おおむね3ヶ国から6ヶ国程度での枠組みを重視する方針として使われている。ミニラテラリズムとブルーリテラリズムのニュアンスの違いを指摘する論者もいるが⁵、少なくともインド外交の当事者はほぼ同義と見ている。ジャイシャンカル外相は2021年9月にオーストラリアで行った発言のなかで、「グローバルな安定を求めて、ブルーリテラリズムという新たな形態を考えるに至った。これは、オーストラリアのあなた方がミニラテラリズムと呼ぶものであると私は理解している」と述べている。ただし、ミニとプルーラルという語義の違いもあり、ブルーリテラリズムはミニラテラリズムほど少ない国の数には限定されない傾向がある。つまりブルーリテラリズムとは、地域やグローバルな枠組みではなく、関心や利害の一致する3ヶ国以上で形成される枠組みを重視する方針、として整理できよう。参加する国の数の問題よりも、イシューごとに利害の一致する国々で柔軟に協力を行う、というニュアンスが強い。

国際貿易の分野では先に用いられていたブルーリテラリズムという用語がインド国際関係のコンテキストに導入された経緯は定かでないが、管見の限りではおそらく、サミール・サラン（Samir Saran）の議論が重要な位置を占めている。2015年に刊行された『オックスフォード・インド外交政策ハンドブック（The Oxford Handbook of Indian Foreign Policy）』において、サランは「インドの現代のブルーリテラリズム」という章を著し、そのなかで「インドは、複数の小規模なマルチラテラルのグループ（multiple mini-multilateral groupings）を形成し、あるいはそれらのメンバーとなっており、それらはおそらくクラブ

のような性質が強い。このマルチラテラリズムへの新たなアプローチは、『ブルーリテラリズム』と表現するのが最適であろう」と論じていた⁶。ここでは、BRICS、IBSA、BASIC、RIC、上海協力機構、G20 を例示しており、ミニラテラリズムよりは多くの国の枠組みも射程に含んでいることがわかる。

インド政府による公的な言説への登場は、インド外務省のウェブサイトで筆者が行った検索の限りでは、2021年4月のラーイシーナー・ダイアログ（Raishina Dialogue）が初出であった。会議を主催するオブザーバー・リサーチ・ファウンデーション（ORF）の代表でもある前出のサランに、ジャイシャンカル外相、そのほかに2人を加えた計4人で行われたパネルで、サランがインド外交における「ブルーリテラルな枠組み（plurilateral arrangement）」の問題を提起し、これに対してジャイシャンカル外相は冒頭で引用した著書で述べているような見解を語っている⁷。なお、ダイアログへの参加後、ジャイシャンカル外相は Twitter 上でも下記のように、インドだけでなく世界の潮流であるとの見方を示している。

マルチラテラリズムは失敗した。二国間の取り決めもかつてとは異なる。世界は多極、リバランス、ブルーリテラリズムに向かっている。価値と利益の共有が、新たな組み合わせを生み出している⁸

これ以降、ジャイシャンカル外相や外務次官の発言においてもブルーリテラリズムがしばしば用いられている。

ブルーリテラリズムのトレンド変化

では実際のインドの国際関係において、ブルーリテラリズムはどのような展開を見ているのか。ブルーリテラリズムの例として主に言及されるミニラテラルな枠組みに絞って整理すると、下記のようになる。

表 インドの主なミニラテラル枠組み

開始年	名称	参加国、機関
2002	RIC	ロシア、インド、中国
2003	IBSA	インド、ブラジル、南アフリカ
2005	G4	インド、日本、ドイツ、ブラジル
2006	BRICs	ブラジル、ロシア、インド、中国

2007	QUAD 1.0	インド、日本、アメリカ、オーストラリア
2009	BASIC	ブラジル、南アフリカ、インド、中国
2011	BRICS	ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ
2015	JAI	日本、アメリカ、インド
2017	QUAD 2.0	インド、日本、アメリカ、オーストラリア
2021	I2U2	インド、イスラエル、アラブ首長国連邦、アメリカ

(出所) 筆者作成。

(注) 一部の開始年については諸説あり。

上記はいずれも 21 世紀に入ってからを開始年としているが、RIC に向けたロシア主導の動きは 20 世紀末からあり、またミニラテラルではないがブルーリテラリズムに含まれることもある G20 は 1999 年に始まっているため、インドのブルーリテラリズムが 21 世紀になってから始まったとするのはやや不正確であり、2000 年前後に始まったとするのがより適切であろう。

そして、ブルーリテラリズムの展開にもトレンドの変化が見られる。提携した相手国を眺めると、途中までは中国がたびたび現れるのに対して、ナレンドラ・モーディー (Narendra Modi) 政権の成立する 2014 年ごろを境として、中国が消えてアメリカが現れるようになってきている。これは偶然ではなく、本サイト上に先に発表した論稿⁹で示したような「多極世界」から「多極アジア」へのインドの対外政策の重心変化を反映したものである。つまり、以前はロシアや中国との連携によってグローバルなレベルでアメリカや西欧に対抗する姿勢が目立っていたが、アジアにおいて中国の増長に対抗するためにアメリカや日本と連携するようになってきているのである。

—注—

- ¹ 一例として、Satoshi Oyane, “‘Plurilateralism’ of the United States and its APEC Policies,” IDE APEC Study Center Working Paper Series 00/01, No. 5, March 2001.
- ² 原著は S. Jaishankar, *The India Way: Strategies for an Uncertain World*, New Delhi: HarperCollins, 2020. 著者は現外相であるが、外務次官退任から外相就任まで公職から離れていた時期に行われた講演に基づいている。
- ³ Christophe Jaffrelot, “Christophe Jaffrelot reviews ‘The India Way: Strategies for an Uncertain World’ by Dr S. Jaishankar,” Atlantic Council, May 26, 2021 [<https://www.atlanticcouncil.org/blogs/southasiasource/christophe-jaffrelot-reviews-the-india-way-strategies-for-an-uncertain-world-by-dr-s-jaishankar/>].
- ⁴ 一例として、Swaran Singh, “India’s Pursuit of Plurilateralism,” *Extraordinary and Plenipotentiary Diplomatist*, 2022 Annual Edition, pp. 42-45

- ⁵ たとえば Singh “India’s Pursuit of Plurilateralism”では、ブルーリテラリズムに対等な協調的關係というニュアンスを見だし、大国主導のミニラテラリズムと区別しているが、このような捉え方は主流でない。
- ⁶ Samir Saran, “India’s Contemporary Plurilateralism,” in David M. Malone, C. Raja Mohan, and Srinath Raghavan, eds., *The Oxford Handbook of Indian Foreign Policy*, Oxford: Oxford University Press, 2015, p. 623.
- ⁷ “External Affairs Minister participates in a panel discussion at the Raisina Dialogue 2021- “Crimson Tide, Blue Geometries: New Partnerships for the Indo-Pacific” (14-04-2021),” Ministry of External Affairs, Government of India, April 15, 2021
[<https://www.mea.gov.in/interviews.htm?dtl/33806/external+affairs+minister+participates+in+a+panel+discussion+at+the+raisina+dialogue+2021+crimson+tide+blue+geometries+new+partnerships+for+the+indopacific+14042021>].
- ⁸ Twitter, April 14, 2021 [<https://twitter.com/drsjaishankar/status/1382342185325060096>].
- ⁹ 溜和敏「複層的秩序論から考えるインドの対中認識」日本国際問題研究所、2021年3月 [<https://www.jiia.or.jp/research-report/post-79.html>]。また、下記も参照されたい。溜和敏「「多極世界」から「多極アジア」へ：インド外交の鍵握る中国」『Wedge』2023年1月号、58-61ページ。